

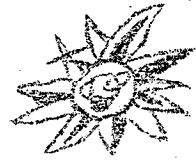
無名通信



3月

1960

私は隠れ蓑を着ていた



阪田さかえ



私於これと頭禱用紙に書くまゝには何日かたった。

私の中にある良くみせようとするもの、劣等感、嫉妬、それ等に対する倦怠、そういう壁があるためだ。

けれど考えてみると、これに書いたものが自分の総てではないし、私もこれから厳しい現実と変わってゆくだろうから、無理にまとめるうとするとかえっておかしくなる。とにかく取ったことをそのまま書くことから始めようと思う。

八月×日

人形劇の練習が億劫になつた。

私は十日前から自分のからだの愛護に気がついてきた。つわりの前兆らしい。悪いせいもあるが微熱が続きはさけがする。前にも子供が生れると共稼ぎが無理になるし、至極端にも落ちついてから、まだ若いし、人形劇も出来なくなる。こんな理由で自分のからだの中の小さないのちをなきものにしてみました。

私は子供がほしい。からだがあまり強くないというところもあるが、前のようなことは繰り返したくはない。ア方、夫は何と云ったか忘れた。まだん子供がほしいと云ったに違いない。

文化運動が出来んようになる。夫は頭をかかえてこつた。私は男がちなむようと思った。死を強要されているとさえ思った。ギイギイ歯がしりしりし、声を出して泣いた。にえられなかった。考えていないのは正しい一番先に人形劇のことや運動のことを考えた。

私は子供が生れども共稼ぎの落着生にはなりたくないと取つていながら、至清約不安や苦痛はこぼさず感じない。と云つても二人の収入を合算してやつと一人前なの出来ははない。子供が生れるとほんとに文化運動のいろんな仕事はささなくなるだろうか、とにかく私は子供がほしい。

九月×日

もう勤めを休んで二十日を過ぎる。新吾所から社がしいから出ていといと電話がかかる。中小企業だか

ら無理もない、對等の交番などあつたものではない。生理休暇もなければ、産前産後の休暇もない。二三日の休養すら取れない。いつかの社長が言葉、海を渡した。二んまこと位はさかすかするものか、私も意味があるから頭目から出勤する。死に運命のため欠勤致しましと書き書いてもらう。また次の日える句い仕事つく。雨からトマト二つと無き少いのもことをやつと運命。明日の二ともあるのさ。一日床につかぬよう努めたが、まだ心からする。人はスタイルも良くもなつたといふ。美しいとひやない。リンゴの汁をえ受けつけず、一時は死ぬるのかと思つたくらいだ。勤務先のものは今時分。まだ、つわり位を床下ついたりして、と悪口をいっているだろう。

十月×日

今日、妹の運動会。菓子とくけと書はミカンを買つて入をばりに買案に帰る。

腹に心配をか付た人なつてもりて口頭よりよけい成しやきまねる言分な情なくなつた。

母はよく私に姉の話や嫁ぎ先の話をする。姉は私に姉の話や嫁ぎ先の話をしとや、お姉さんとの前夜を話すのには私にどうして話さないのだから。親でも他人のどう思氣がする。

私は、私達夫婦は姉達夫婦よりもよつと愛どまじと想つてはいるが人の言うような理想の反カツザルとはない。どうしても夫と私の間も。他人さかといふ断絶感なまぬがれない。夫もこれを感じている。

おもう。親に對しても夫に對してもさうだ。自分だけ遠くはなれてゆくような氣がしてならない。

十一月×日

夫が二日前外泊。何も連絡がな

い。あまり心配なのでサークル村の事△局をたせねた。よつていはいこのこと。

夫は最近組合の仕事と考え方とのくいちがひや、死との間に起つた衝動をどうに扱っている感じ。いつだつたか官僚主義にありそをつかしながらも自分直さうなつてしまひどうせと女つていたのを思い出す。

もしかすると深淵を重の前にとぶだしたり、虚嘩をもしてけがをしていゝるのではないか？こんなことは思い出しさうか。

夫は今いつた何を考えているのさう。食事も何とんど一着にするのではない。話をする機会がほしい。平凡な家庭生活を望んでいるのではないが、私は今のような状態はがまん出来ない。人形劇の練習は中断。あせらお上一生の仕事にしたい。今の状態を出来ることを整理しておこう。

十一月×日

十二月×日

夫の不在の折、借金取りが家をとすねてきた。夫は私に心配させぬために黙っていたのかも知れないが、私はみんな分っているのに。この酒をのめば家計にひびく。夫はそれを知っている。知っていないから借金でそれをどうしようもなくて往生しているのが私には分る。何か悪魔のようなものから厄をひっぱられてる感じ。何だろう。何故こんなになるのだろう。

一月×日

河名輝りに森崎和江さんのところによる。ちようど谷川雁さん仕事の際中。元日に夫が何やら二人の向顔話を話したらいい。最近はどうかぬかと真正面から向われどキツとした。どうも思わしくないんです。私も苦しかったから思いついて話した。谷川さんは二人な事を云った。さかえちや

んは苦しいと云いニコニコとするくせがあるね。確かにならう。

彼は「さかえちやんは何んちゆう二とはない」と云ったそうだが、いつもほがらかる。一丁目一番地の店といわれたら、「どっこいさうではない」と云いたいだろう。確かにならう。

さき 四月十六日(土曜)夜
四月十七日(日曜) 晝
宇部市 沖の山
厚生野 四の二四
テーマ 女の労働について
X X X
受入体制が逐々できています。何人来るか、明確なところ知らせてください。土曜、日曜にかけ是非いらしてください。二、三日泊られる方もそのおつもりでどうせゆっくり予定を組んて来られるといいと思えます。時商御一裁下さい。此方から取まで向えにあげります。 宇部グループ

私は無名になりたい、どう思いたがら飯糰に良い感じになりたい。どこかあるところがある。そのまめ天とけんかになることでも、父や母の手前突ってすませていることもある。私は裸になりたい。私は夫と裸でひきあひ思ひまじりけんかしたい。

出発される方は編集部へおしらせください。さきさきおしらせたいと思えます。

考えて考えて、努力したのち二人の生活が無意味なら、苦惱しても一向に差支えはないと思つて

いる。

わたしたちの

おばさん

N. M

しんぼせよ、しんぼせよ

しんぼせよすれば

やがて 三年満期には

××行きの団体汽車を

つれて帰るよわが故郷

女工表裏時代にくらわれた二の

替え歌が、今の紡績寮宿舎である

程度の実験をいつてうたわれる。

見上げるようなコンクリートの塔

に囲まれた工場。女子寮宿舎はその

の奥にあります。通行門はあざか

三又、今こぞないが、二十三年頃

までは門券というものがあつて、

それがなければ外出はできなかつ

た。今はたゞ門券がないというだ

けで出入りに門番の目をのがれる

ことはできたい。しかし、寮宿舎

の設備はいそりつくせり、水道

風呂、アイロン機、洗濯場、娯楽

室、テレビ、体育場、不足なもの
は自治会を通じての要求はたい
い辭き入れられる。

寮舎から出てきたものにはこのよ
うな生活がすべて文化的にみえて
満足する。それから彼女達を紡績

にひきつける条件は会社の中に高
校があるということ。家がまづし
いため高校進学をあきらめた人達

が私達は切なきながら学べるのだと
いうほこり。だがそれがどんなに
会社に都合のよい学校であるかと

いうことがあつてわかる。程度は
高校程度というけれど中学の復習
のようなものを持つて入れられ

るのが和洋教。出席がよくて和洋
教が上手であれば社長賞は前達い
なしというところ。寮宿舎の中は

無風地帯だ、風がない夜に満足し
てしまえばたゞびたすりに仿いで
金を貯め和洋教を一生懸命やつて

自分はいもう一人前に花嫁修業し
たと願つて満足する。

色から紡績の人は外部のことには
外うとい。たとえは、今、米が一
升いくらかと云つても知らないし

野菜がどのような値か知らない
。よく知つていのは映画館の入
場料と呉服地の値ぐらい。しかし

といていの人がこのような単純な
生活に満足しきれない。特に戦后
の新しい教育を受け入社した人

たちの中には、うどうして寮宿舎
のおばさんに先生つていうのにと
か「組合は私達が学校を習ったの

ところがうふ」とか、入社して二、
三ヶ月するとこのようになん
気付く。私たちはこのようになん

たちを集めてサークルをつくら
。そしてこれを組合の山の丘しよ
うとしたが組合はあまりよろこば

ない。一部の幹部のたぐいには前が
会社にしろせしめよう。組合いの必
要がわかっては集まる場所がない

し、学習の必要がわかってはリ
外うがなくて二十、三年前の娘たち

は迷ってしまふ。外に集まる場所がなければとゞきれ掛けを頼つていた私たちは、外部区のある会合で一人の中年のおばさんを知つた。おばさんは比較的裕福な家庭のおくさんで、おじいちゃん、おばあちゃん、御主人と息子さんという暮らし。旧制の女学校を出たというおばさんは文学に趣味があつて家族もそんなおばさんに理解があり、家事のかたわら本をよんだり近所のおくさん四五人と集つて話をしたりしておられた。そんなので、ような生活にも満足されないのがあつて、あるときはアカハタの立寄りをしたり、又あるときは遊券所を本屋の店番に通つたりしておられた。私たちが心やすく家を貸してくれた「ルウ」の歳になつてはなにも過ぎないけれど、みんなと一語二語が過ぎるだけであつたらしい。又私に過ぎる輩のひとつ「よ」といふおられた。よくお

ばさんは私に「結婚はいくらとせよ」とつていふせよといはれませぬ。あなたのような活動をした人には普通の結婚生活はどうていたえられたいだろう。この人こそ思つ人があらわれるまで待ちなさい。私のように二人でおくさんになつてからいくら後悔してもためよしといわれた。それは、自分の行動に何ひとつ干渉しないかわり、精神的な話の過ぎない御主人に対する抗議のようにも返された。昭和の初期女学校にいたおばさんはその頃の社会的な影響が充分にあつたのせう。そして、その若い青春を彩る何ものかがあつたのかと知れない。

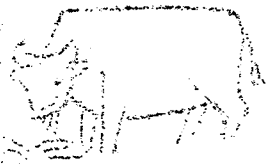
仲間たちはいまはおばさんの家を借りて学習したり、話合ひをしたりして成長しつつある。おばさんは自分の誤ちを嫌うたくりかえさすまいとしている。

。自己紹介。

- | | |
|--------|-----------|
| 出口キク代 | 宇部市厚生町四丁目 |
| 樺 幸子 | 宇部市球生町 |
| 重 幸子 | 宇部市大字野田地 |
| 中村 芳枝 | 宇部市唐ノ原市菅住 |
| 藤井 | 宇部市日原内 |
| 上野 洋子 | 古川鳥峰花台 |
| 松尾せつ子 | 宇部市東中洲千日前 |
| 山田 慎子 | 宇部市九太区学部 |
| 島崎 清子 | 宇部市三ノ山 |
| 赤星久園子 | 宇部市新二坑 |
| 高田 信子 | 中府市大根土白塔 |
| 小柳 | |
| 井又保伊登子 | 八幡市木屋瀬町野面 |
| 塚原 淳子 | 飯島市電報局内 |
| 大塚かすみ | 全島市飯島町 |
| 梶原小く子 | 山田市一町 |
| 松本 朝枝 | 水俣市南福寺内山 |
| 新田とし子 | 市役所 |
| 石牟礼道子 | 市役所 |
| 村山 久子 | 宇部市東野田地 |
| 米崎 淳子 | 宇部市東野田地 |
| 遠藤 康子 | 宇部市東野田地 |

小町の美容室

村中の人々



小町の村の小さい部落に、私たちが美容室を
っている。女であつては生活かをこぼれ、八里前か
ら美容界の生活を始めた。依頼制度のきびしい誇異
中は手首ばかりが私をとりまいた。金のなかにうす
くまつた人、パン食うことにも慮られぬ人、仿さぬ
がらぎぶ人、万人相手の職業柄さうまな廣國の人
に接する。人間誰かが同じように幸せを、と願つ
たろう。深草のような生活のなかで、私は自分を愛
していきたい。人間としての要求をみたすために、
私なりの努力をつづけたい。それは二人若さとい
ふことだけだ。

一、美容師は平等であることと忘れぬ。一、良
と思つたことと積極的であること。一人の若さ
き自分の気持を伝える。一、相手の価値を認める。
一、卑屈にあらざらば、誇りた態度。

いまは、一人の人間の長びがみんなの長びになつ
ていない。一人の人間の悩みをみんな苦しむこと
はさきでいい。それがささるようになつていきな
い。私に美容師としての使命があるならば、村会のこと

これら美容室の主は長く、人を指導する講師でも
なく、汗をこぼしたおばさん、おむつ臭いおばさ
ん、そんな人々をさらいに仕上休てやることだと思
う。さらいになつた髪がそのまゝ、村の女性たちの生活
を建てるように、女性たちの日常生活のなかへ入つて
いくことだ。

村で村々人々の心と年の美容室として誇りをもち
たい。

梶原 小 子

女の故郷の誇り興味深く読みました。とくに野
口さんの祝詞。アブが強く寂しいのを感じます。
會しと致のみじんくいなりのけけはなごぞうな気がし
ます。

さし申しますと誇りたになつては二りのように残
るりの、それは真全体に關係してると思ひますが
。山口県の祝詞、それだけなれども覚えていて価値があ
りそうです。
さしつかえなかつたら、野口さんの祖父さんの代か
ら野口つながって生きて二られたおはなしを聞きた
いと願ひます。

村の女教師

井久保 伊登子

一 村 人 謹

上りの山陰線山口県から島根県に入つてすぐある市が益田市、次が浜田市。浜田市の駅前からは石見交通のバスが教本各地方に向け出て出る。その中で波佐行きを求める。中国山脉の中、広島との県境にある波佐まで約二時間。その丁度中程、四十五分位の雲城の村に着く。山の向を流れる谷川に沿つて十余りの部落が散在する。それらをひっきりぬめて雲城と呼ぶ。昔は雲城村だったが、数年前、今福・波佐と合併して金城村になった。それそれの旧村は一枚づつ中学校をもち、一地区をなしている。雲城は麓の底の標下山下囲まれているが、この中で南にせばぬけて坂を誇っているのが雲城山。それと高を並べてやや黒ずみかすんで新しいのが金城山。実際には金城山の方が高いのだが、これは波佐との境にある遠さなのを雲城山の方が高く見える。

浜田からの道と、波佐からの道と、今福からの道と、その三つの集まる所が雲城の心臓である。郵便局、農校、役場を中心とちよつとした町並を築いている。月々何度か、雲城の主婦達はオイノコといふ

袋を背負つて歩いて来て、役場や店を前を定すと買出しの袋を持っていく。

通りは東面に向わっているが、南側の店々の裏には川敷じつ山まる田がひろがり、北側の店々の後は山になっていく。その北側の町並の向から山に向つて緩か反石段がある。上には山を切り崩してできた小とな運動場があり平屋の小学校と中学校が並んでいる。雲城の子等は山峡から、山頂近くから、谷川の岸から、田の中からこの二つの学校に集つて来る。遠い村は二里の上あるという。その中、中学生は百五十人前後おり、三棟と屋内体操場が石廊下で築かれた校舎に通う。教員は生徒数の多少を十一人と九人の向を前後する。雲城の催し物は古い小学校の講堂か、新しい中学校の屋体で行われる。

大学の卒業式から半月も経たぬ四月七日、私は旅行靴と蛍光灯スタンドの風呂敷包みを両手にこの地に着いた。蒸いセーターの上はスーツ。そしてスラリントを着ると、四月の熊本は汗ばれたが、こゝは昼近くなつて肌寒かった。

入学式と新任式が午前中を終ると、教頭は電話で連絡してゆいた下階の丸木屋に連れて行つてくれた。

色艶の悪い林檎や蜜柑、町田煮など並べた茶暗い
店の奥へ入ると、黒光りのする板の向、上り框から
緩やかに采き出た巾着い階段。その向二うの田の字
型に襖を区切られた暗い部屋。全て裏家の構えだっ
た格子や蹴しにある台所にも、百姓屋特有の流し厨
かまどの土をすまいが見られた。

色白で頬骨の高い一重瞼の主婦が出てきて甲斐い
声で「新しいお先生ですか。よう未なごった。出来
とりますよ」と。と、殿後の言葉は教頭に向けて文っ
た。教頭もついでに頼んできたのかして古い大
さな卓の前へ坐り、台所に戻って忙がしく動いてい
る主婦の背に声をかけた。

「相変らずの繁盛らしいなあ」
「へえ、今日は農校に集りがあるいいですが」と主
婦は笑いしせや、皿小鉢を入れたら必たを二つ重
ね、体をのけ送らせて上向を急ぎながら

「まあごゆっくり」と文った。机の真中に蓋をとっ
た一升入りの飯櫃がほこり湯気を立てていた。
卓の片隅には伏せた茶碗、青菜と卵焼きの皿、器
の煮付の小鉢、漬物の小皿がそれぞれ四つづつ、雑炊
とおいてあった。そのうち二人の若い教師も系て
自分で飯を盛り束を寄せて食べ出した。

香食のあと二階に案内された。裏の別棟の下宿
としてる部屋はつまつたりますけえ寂寂しいとるこ
ころ。と主婦は、巨当りのよい廊下に沿って同じ
六畳が三つ並んでいる。その一番前に導き入れた。
低い天井、古い畳、張替球を吊したその部屋は他へ
何れなかつた。つとて当りの騒音な雑子を無くし
すぐ屋根が表裏り、トラックやオート三輪の行き来
する跡壁が目の前までまよい上つて来た。

午後からは新任の挨拶に廻るようになされた。
四十からみの新校長は私より二つ上位という町教師
と共に、三輪の阿佐という先生について出かけた。
「えー、私、この農浜田二中よりこちらに参りまし
た甲野と申す者でございます。おにがん不承者であ
り、且又この土地には不馴れでございますので何と
ぞよろしくお導き下さいますようお願いいたします。こ
こ、こちら笠井、坪田、共に新しくお世話になりま
す。同様よろしくお頼み申し上げます。案内に立
つ人に一言いわけぬ滑りがさる寂れ出る校長の挨拶
は、まさか町並からの浜田への道に沿って五百米も
高れでいる小学校校長から始まった。

線田小学校校長夫人は見えまない愛想笑いのうち野
原着姿を弁解して、極めて腰低く挨拶を返した。

この人は普通の農婦とは違つた物で、悪く言えば、人それのしに、よく云えれば、扱けのしにものこもつていた。——この人が、小学校教員の経歴もあつて、豊城地区婦人会々長であり、豊城中学校PTA副会長であり、その他諸々の役もあつて豊城一の社交女性である事を、私も次第に知つていった。

豊田家から町並への道は、西側に表田が山際まで開け、東側にその中に夫々あつた。その東家の屋敷は河津も赤か黒かの瓦葺きであつた。この中の一室を覗き込むのは、大さ放平たい小屋から傾斜させた階を建の手につき登つた瓦工場であつた。階間に近い土泥や藁屑や新米皮が散らかつていて、石見皿、汽單の窓から見える石見の瓦葺きは、日本海の暮を前に、陽を交けて輝いていた。

二軒の飲食屋と三軒の旅館兼食品店——丸木屋と三船が両端に對にあつて階並をほとんど占めていた。その間に大小五つの万屋、店といふべき全部、町並に店を一番巾をさかしてゐるのは歌麩子であつた。この歌人の唇を相手にするかみさんか断つていたが、主客一様二手を止めた。人々は校長の挨拶に感銘しながらも遠慮なくこちらを觀望した。私達は姿が隠れるまま仕事を中止した人々に冠送られた。

支所へ金沢村役場平床は今日起に在った。郵便局、農政、小学校等は——入口に私塾が立つと、生徒一団が起立する。校長の口上が始まると、皆神物に對して静まる。終ると一奇に礼をして着席する。さつと仕事なり雑談なりに戻つて行く。その切りかたは難かだつた。この人達は村人達とは異う顔と服装をしていて、いふなれば豊城の木ワイトカラー族であつた。

通りから波佐への道に投げて三百米も行くといふ珍しく、溝道やコンキ塗りやの建物がある。女陣の股に「内科、外科、小児科、レントゲン科、齒科、入院科、津田医院」と記した白い看板が立つてゐる。玄關に受付口があり、上るとすぐ待合室である。ほんやりした幼い女中が取り次ぐと、土の臭いに全く縁のない異様な肌われた。四十前後位ううが化粧が濃く、灰の毛のワンピースに同系色で刺繍入りのカーデガンを羽織つていた。口に手を当てて「宅は今日分院に参りまして」との事だつた。——金沢村唯一の医療者だつた。医師は元軍医、夫人は元看護婦。村一の物持である、自家製の高級車を持ち、ハミリカメラを常に最初にお求め、その上村の教育委員だつた。

通りを引返し、北に今橋への道に出ると山側

になつた。村会評長の家、PTA役員の家があつた。出てきたのはみ友化粧氣なく、節立つた指を以つ農婦ばかりだつた。途中でも幾人かの農婦達が丁等に挨拶して行つたが、この夫人達には一種の自持がみられた。が家の入口より、路傍でも、店と同様に好奇心はむくつけに露わされた。――映画観も思世の小屋にないこの村では、新しく入つてきた世所着な姿、話の體に作り易かつた。途中、所から来た女教師などは頼つていらない着たつた。その言動一々に話頭になり、身に付けた衣履が記憶され、買物の金高が噂になり、給料の額が穿鑿された。人々の見聞きした事は、恋る可き事ごと抜かりで紛飾つてながら、語り継ぎ去い継ぎ行かれた。

私についてはこんな批評がその日の中に抜がつたと、後になつて知らされた。

「今度中学校に来た女先生はあんまり若すぎりやせんか。子供じみて頼りがな^いわ、尻振つて跳んで歩いとる。けんど何より氣に入らんなああの服装だ。襪のスカートはまだこらえられるが、運動靴のお。ありやあいかん。大體運動靴いうんなあ運動会か山登りにしかほかんしんだけえぬ。先生とあるうらんながのお。皮靴もはかんたあ、はね返りらんから知

らん」。このズックにはそれなりの理由があつたのだ。熊本の高校の採用通知を頼みと、私は暫く熊本に止まっていたるつもりだつた。ところが浜田教育審ム所からの四月一日付の採用通知と七日付に赴任の事という命令が、びび島根に来いと愈を押しした父親の手紙に訂正されて三日になつて着いた。松江に所親のいる事だし、熊本もあてにはならぬ。私は慌てて仕事を片付けた。荷造りは運送屋に頼んで転出届アルバイトの口の断り、先生や友人への挨拶をセーターにストラックス・ズックという遊ばすませていった。が浜田行きの際について運送屋に去い置く事を覚えていた。前日の六日になりさて、と赴任仕度を整える段になつた時、私の靴一のハイヒールは運ば去られた後だつた。その夕方七時、急行を乗たおぼならぬ私は残り少くなつた金を氣にしながら新しいズックと白いソックスを求めた。噂を伝えてくれたのは丸木屋から移つていつた川田屋の主人だつたが私の弁明を、「それがあな話、誰^も知りやせんどだけ之氣い付けんさるが一番だあね」と一向にとりあつて呉れなかつたし、まして社の運中に宣伝してやろうともいわなかつた。

バーの女たち

梶塚 田鶴子



今をときめく伝音歌手のメロデーが今夜はホールを埋めています。バーの女たちも生活は午後四時に始まります。四時になると、今までの時計とを交換して足さばき水気ばわしくなれ、二階を下りたり上ったり、廊下をすり足る行ったり止ったり、やれやれおれおれとそれにはそれだけ忙しくなるのです。二階は女たちの部屋に定められています。

階下よりマスタートのにぎやかな大音響、ゴキウ音のあいたき入らんかーしやかまじ屋のおばらやんのヒステリックな黄色い声、そこはただよ早うとべんとのうなるよ早く下りておいでよと、次々にお客に入ったり食べたりして時尚を空気に使わなければなりません。女たちはひとひそひそかつぱー、また始まったヒスがわかっていっているようなさいなめさんて女のながらそれさ階段を三三五五と下りて行きます。私もその日四時に風呂を借りて入り夕食は白米のめし、モヤシの油いためにハムをすませ、二階へ上りました。二階はいつものまにか張やが友会誌と夜りの仕事への準備が開始されるのです。また、

アリンシンを置き取り、次にゴールドをマッサーシ、アストリンゼント乳液、ファンデーシヨン、頬紅、アイシヤドワ、きりりかとおかきまわすの女たち、よく、別の美しい個性、美女が出来る上り鏡に向かっただけ満足そうには、美んをみるのみです。洋服を着、アフセザ、リトをつけて階下のホールへ下りて行きます。ホルのオ、デンは午後六時です。私は昔着のシレーの上には紺と緑の中筒のカーデガンを引っ掛け、赤茶色のタイドスカートという姿で下へ行きました。ホルはあまり大きくありませんが、全体の装飾はエシ、ゴンスで大受感ひの良い竹でした。テールブルが五脚、あつてそれには椅子が置いてあり、テールブルの上には丸型の灰皿とマツ子、下にはライターが用意され、色は黒と白です。椅子カバーはナイロンの黄色一色、そのホルの感じを生かしてありました。テールブルの番号は一二三五六と呼ぶ、丸が除いてあります。血は死を連想させるの、けてあるそうです。水商売、本座に、縁起をかつぐようです。店に出ているときは針仕事はいけな、縁という二、三使っているいはけな、夕方ドビンの口を入口に向けて置くといけな、何か云われます。階段は必ず最後に登って下りる事、途中でやめて

上つたりしてはいけません。他の商売人もさうだと思ひます。

テールの中夾に赤い傘をかぶった野球があり、玄関に大きな長四角のネオンがあり、六時と共一せいに灯ります。電音は早いテンネからスローに交りマンネ類ルンバと流れ、カウスターもびかびかに光り洋酒店にはいつて人も人間の体内へ入るよう液体が待ちがまえているのです。液体は人間の内臓へ入りその人間の一日を慰めやすらびを与え、衆しい語りあう場を盛り出してくれるのです。要するに不満や苦しみを吐きだされたい感情をさかまける一つの源とも云えると思ひます。すべての物体が自分の生命をある華に力を注ぎ活動するのです。女たちも、めずらしい熱帯植物のゴムの木や、大きな天空のウチワのような葉を持つ木やモミの木等も、自然の色と匂いをただよわせ空想しそつと空気をやわらわらしくするようです。私は六番テールの隅に小さな部屋で居りメロディに目を傾けていました。二のときほど自分も嬉しきみじめに思えた事はありませぬ。何一つわからず、そして誰一人新米の私には目もくれませぬ。私は必死で、現在の向とも云え

ない状態より逃れ出ようと願え苦しみ努めました。が数日経たず、いつのまにか時聞も過ぎ、八時頃やうと客の足どりが近づくのを待たす。

一人の客がドアを押して入ってきた。と同時に今までの女たちは素早く立上り各自の持ち声で、いらつしやいませと呼びかけます。得意先の客をあれだけ客分さかさまつた女がオシボリを持ってテールへ案内し、注文を受け自然の流りにそつて語り合います。そしてその女はやつと今日一日の縁が過ぎるのです。九時すぎになると客も多くテールもほとんど占領され、男と女酒と黄色い嬌声もうもつと煙草の煙につつまれます。私もいつの間にかテールに引っぱり出されてしまいました。始めの至験にたがまつかにたがまつかでうつむいて胸の鼓動の早鐘のようになつてきこえるわがせを聞いていました。ママさんの手、女たちの動脈を上目使いに観察している、おや、あの娘は新しいなママさん紹介はんが女なんて名前か友と目の女い事なぞりした男が女いきました。あ、さうさう御紹介しますよ。田嶋子さんです。ニユウフエイズですよろしくお願ひしておきます。と紹介されました。小さな声で「田嶋子ですよろしく」と一言。その一言が何とおそろ

しく初めての就寝の面舞のどきのようだったことをしよう。田崎ちゃんか、あまうとや、二しい名前を「いやはなかないよし」とかいわれながら、一杯の面を渡されました。これも仕事色と笑い「いただきます」と日本酒をうけたら、金の金銀がいしく取りませんとした。女たちは手を握り合ひ着をよせ合った。デニールの上のおドレスを着て、ナツ、いかのつまみ等を口の端へ入れを押しこめす。休日の約束などを語り合ひ合ひました。

私がこの道に入りませしむければならぬのは、女たちにも早く馴じむこと。波に客屋の客船と旅業を知る事です。洋酒やカフセルつまみも覚え、男性の心理状態もつかぬとる必要あります。毎こんどの者に対して漢文字をアトさんアトさんといふと呼び、したがってアトさんい色々、エトさんい色々となれるまゝは大変な仕事です。女たちにも決った目標があるのです。主な仕事は掃除区当番が二班に分かれ、四客ラントホトトリス、トイリスケチ一名、ホシボリ、町屋の掃除一名、一日当番一名です。二の一日当番とは一日の食事い、さい、巻物の取次ぎなどの他の掃除等役を弁出は絶対

に禁されません。A組が当番の場合には午前十時前後に耳をさまし、自分の担当掃除をすませて外出したければ午後三時迄に掃きります。そして廊下と部屋掃除をするのです。掃除は四時迄に掃きします。二の当番はいろいろと河原はありましたが、女たちはどうにかうまくしてたようです。

私はこの世の畜産より一つ多くの掃除を受け持たされた。白粉のちよつとハイカラな隣にヒスのおぼちゃんか今までしてたぞうですが、社がしいの田崎子さんして下といといわれたのです。それはお稲荷様の掃除です、前にもいふまじむが稲荷様は荷売兼買に大切であるぞうだ。赤い木の塚にコンコン涙を流り、油揚、塩、水、シバ、土ハン等そへへ毎朝水の入れかえをします。

一月も半過ぎる頃二人を事もありました。バトの女の一人は田崎子さんの話です。ある夜新しい客が来て彼女が付きましました。彼が田崎子さんと時多に行くと約束をしました。一日お伴して掃りに手袋や、ストッキング、マフラーを買ったものでいきました。ところが彼の友人が数日後来るといふので、彼女を誘ねて来たのです。初め私を出て彼女に取次ぎました。さうさ知らし

と出て行きしばらくくして、ついでに彼女はおぼつと
吹き出しました。佐哲子さんが行くこと、その佐哲
子さんにもあいたいのです。彼女もかんとして、「私が
……」といかけると「え？この前夜の横にいた人で
すか？」とおどろいたのだそうです。化粧してない
昼と、夜とは人違いされるほど変化するのかと彼女
感心していましたが、何か一まつの間影のような
ものが、すーっと心の中を横切ったように私ははっ
としました。その人の用件は佐哲子さんと一語に
行った彼が突然姿を消したことに驚いていました。
原因は金の使い込みとか。もしや何か連絡をとると
さし来たのだそうです。彼女全然知らずびっくりし
ていました。次の日彼の兄に当る方がぞつとみえて
佐哲子さんと話っていました。兄さん達はおとなし
い弟が金を使い込んだのは女が出来たに相違ないと
みて、どのようにして探したのか彼女の所へ来たわ
けです。勿り彼女は彼とはたった一度友達としてつ
き合っただけ何れ知りません。気の弱い人はどう
だから約束はしたものの、一度持合はかなく、悪戯
なく借りたのがわかってどうすればとび出した
のかは知れない、いかにして健在であつてほしい
とこの夜二人をばばと語った次第です。

孤立したところから

泉

俊子

泉橋を思い勤めから帰つて来ましたの二人は
お便り程度になつてしましました。私のいつている
阿頼は何だろうかと、つきつめて深く考える真剣こ
が足りないせいもあつたさしように、無名通信に
書いている人達と私はあまりにも隔れてゐるような
感じがして。私の生活や考へてゐることなど書いて
も仕方はない。とりあはせ阿頼にするようなこと
もないし、話してみても駄目だという引つらみ思案
が先立つてくおつてゐます。雇手に取られ、気
わしく働き、平凡な教師を担任研究しせよ新しい
みればお受持時向を無差に遇すことをおがいてやら
つてゐる有様。家に帰れば帰つたであまり平和さ
か在家庭にはありませんがら伸び伸びと幸福に
れる華しい状態です。寝れてしまつて陽当りの
い所をのんびり坐つて齋物でもしてゐる、といつた
毎日を送るようになりたいと希うようになつてしま
つてゐるのです。二ついうふうにかこく二つして
まおうとする自分を何とか立直らせたいと思ひます

砂時計

長崎市 大夏 久代

あるのですけれど、事案から仕方
がありませぬ。

長崎市

注瀬

壽子

今日は日曜ですごくよいお天気です。春らしいのが嬉しくて、カキ

「無名園」に拜見しました。みん
な大変さういふ趣う。二枚だけ

にゆくぞうです。ハズが二の炭坑
からのあつせんを東北砂鉄に就底
されるのさ。羨望もたのみ、会費
もつづけたくはさるよう頼んでお
きました。

フラワーやレタスやスリンピース
などを賣つて来て、市民館でカラ

くのは大変だしかけお返しに尊敬
します。嬉々多分、うひ人屋敷

月刊炭坑一月号の森崎和江の炭坑
の女談が胸がいなでいるところ
です。炭坑の会長に就んでら
んなつせとすすめたところ、ガン

ジホを聞いて居りました。何と
かいウイタリや突垂さどうも十千

我中山美代子さんの「木」の島
こころらしいお返。

さよく聞くと谷川程のこと、講義
さいて感銘し、一月号よむように
す、められたとか、私の炭坑もあ
と二年。

に對するゲリラ運動のことらしいか
ったの。講つた一人が不意に

入道米市 古賀 壽子

二瀬の組合員がタイ木された。夫
人を光頭に抗議しましたようは婦
人向願は解決しません。

自分は何もしなかつたのかにどうし
てこんな目に会ふのかと泣き事を

うの吐息らしい。二つ一つの手が
かりして涙めを打つて、みんな

人向願は解決しません。

いいましたら、今一人が何もしな
かつたのがあなたの手へこの筆話

ねかりそうは気がします。体力は
少しずつ減っているつもり。いつ

つみです。

はさらい出すけれど、友の世とい
ました。私は突然目の前に立つ

か集金のお仲間にはなれていただけ
る日をこのしみにしていきます。

通信六号の中山美代子さんの筆、
なかなかいい詩だと思いました。

な巨人が立ちはたかつたようは
がしました。鯉魚のタイジエ

山崎市 森田 ヤエ子

通信六号の中山美代子さんの筆、
なかなかいい詩だと思いました。

版にガンとなるなんて思ひな
くて、自分の神聖の糸口が破

函館人の子さん二人と青森八村

通信六号の中山美代子さんの筆、
なかなかいい詩だと思いました。

無名園通信

8・1960・3・10の発行

無名園通信 長崎県中崎市本町六丁目九州計一クル研究会内